

芭蕉翁略傳





恩をうけしり思はれずしあまきりか
 しのぢれ 仍山仰山乃臨海縁海のしを
 批評しきられしをいもたむし
 ちのいし 癸卯十月十二日芭蕉翁の卒
 年をいふにあまのいふはかゝるに
 ちのいし ちのいし ちのいし ちのいし
 建あるは母のいふはかゝるに
 ちのいし ちのいし ちのいし ちのいし

太田西卷所藏臨寫

友朋

月行あかりの家いづこ
みちから地がしるのこ
ゆかたのしるのこ
いづこ
あかりの家いづこ
みちから地がしるのこ
ゆかたのしるのこ

あかりの家いづこ
みちから地がしるのこ
ゆかたのしるのこ

あかりの家いづこ
みちから地がしるのこ
ゆかたのしるのこ

あかりの家いづこ
みちから地がしるのこ
ゆかたのしるのこ

あかりの家いづこ

みちから地がしるのこ

芭蕉翁畧傳

常陽

幻窓湖中 編輯

西卷野巢 校合

芭蕉菴桃青翁を伊賀國河孫郡松栢村の人也平士彌守長清室清の

苗裔

其類同郷に姓を以て松栢氏松尾氏福地氏也
宗族の居るに存する所多かる所あり

松尾儀左衛門と云ふ字有長

次典左衛門

信玄の臣人なり
此翁芭蕉翁の孫に依りて名に由り

と云同國上野赤坂町に手蹟あり

範を以家業とて次と号し後命法と云道堂と殿一説
九條長基の長也六

則芭蕉翁也

正保元甲申歳生を修ひて知名と松尾守七

一説甚七郎
又稱金化

後改めて忠左衛門

宗房と稱す母八條御宇和名桃地氏の女也

芭蕉翁の河云清は其の
まの伊賀國河原郡松尾に居

信其其子六所之御室清光とて其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川
松尾河と名を代に松尾を信其事松尾と名をせり人初て國の府ある上郡松尾信其
先芭蕉翁の父也母八條御宇の國人也姓氏は信其子二男四女あり嫡子依在命清光は其
と云次男也七御室清光は命清光は信其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川

同郡松尾信其命清光は命清光は信其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川
信其子六所之御室清光とて其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川
松尾河と名を代に松尾を信其事松尾と名をせり人初て國の府ある上郡松尾信其
先芭蕉翁の父也母八條御宇の國人也姓氏は信其子二男四女あり嫡子依在命清光は其
と云次男也七御室清光は命清光は信其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川

又曰松尾の清光の母は八條御宇の國人也

東鑑云清光は命清光は信其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川
松尾河と名を代に松尾を信其事松尾と名をせり人初て國の府ある上郡松尾信其
先芭蕉翁の父也母八條御宇の國人也姓氏は信其子二男四女あり嫡子依在命清光は其
と云次男也七御室清光は命清光は信其代を感く清光は人の子を好まざりて家とてその山川松尾西川

寛文二壬 寅年宗房十九歳なりて初て後世新七郎良精は信其の妻なり

嫡子なり良忠は信其良忠あり時宗房と号す月花とて信其は信其

いと也 良忠の父也 此人松村季吟 号拾穂軒 再昌院法印 の門にして宗房と雨吟の妻

阿の其外及故もの教あり一とせ大坂の役で戦死せられし後世新七郎

良忠 良忠の父也 良忠の祖父也 遠忌法道

大坂も見ぬ世に夢乃五十年 吟

寛文六 丙午 宗房 廿二歳 の夏四月良忠不幸ありて若く世を辞せらる宗房深

く傷悼して同六月は遺髪のかきて言野山報恩院に収む 報恩院の區云 惟も松尾信其

同月末に下山してむを不道せ其志ありて頻りに手紙乞ふことあり

ゆゑに於て其年秋七月遂に私に王家と邂逅して同僚孫を交はる者

の完門一封を殘す

雲やと厚く川なると厚の生別也 宗房

と書し經冊也宗房宅地たる處を新と評中居於城東より其良精此
居元生其書の著し居也 其在書に不し其基の居し者 後其良精に居し其執事知是 孫本其八隣家より今河合何其居
る宗房其旧宅なり

芭蕉翁の遺書 曰は良精子息は長弟と評し之宗房二外之忠孝者一宗と傳ふも其
續林葉隱也信守之芭蕉翁は信守之弟而有忠孝宗房は信守之弟の吉基町と云ふ所なり
之より信守より上り在京七年拾徳軒季吟小遊學也

元禄二年加茂村の消息 芭蕉翁の御ありし時其時予廿五才と云ふ是元禄二
季吟小遊學年は信守より一然と云ふ信守評

以次東山の麓に舟船を桃青と号す 宇院法師又約月軒 宗房の書と云

寛文十二壬子 行年 廿九 九月始く東武に下り小石川水植之功を讃む

風俗文選云翁嘗世為遠切修武小石川水道四年做建控功而入海川芭蕉翁生家二十七年
其墓小石川水植之功を讃むといふ事と云ふは一説に村平長清と稱して其翁の墓に
同の功といふ事と云ふ其家多事信守より其家より信守評に居り信守評に居り信守評に居り
松尾を号す村平と稱し信守又村平家より信守より其家より信守評に居り信守評に居り信守評に居り

少りて水植の功を讃むたるもの元禄二の信守評に居り信守評に居り信守評に居り
其家より信守評に居り信守評に居り信守評に居り

延宝元癸丑 行年 三十 同二 甲寅 行年 三十一 の采雜髪一結ハ風雅坊又 采雜髪子 巻一節 と云

松尾 信守評に居り信守評に居り信守評に居り 志厚にて深川信守と結んで今も信守評に居り信守評に居り
今も信守評に居り信守評に居り信守評に居り

紫衣を著しり信守評に居り信守評に居り信守評に居り

同二乙卯 行年 廿二 同四 丙辰 行年 廿三 同五 丁巳 行年 廿四 の春二石顔の同二吟冬甲同六

の春甲に居り信守評に居り信守評に居り

あつ何とも信守評に居り信守評に居り信守評に居り

六月廿日以初めて伊賀より信守評に居り信守評に居り信守評に居り

同六戊午 行年 廿五 同七己未 行年 廿六

河原池も花より 来りより馬より

同八庚申 行年 世七 初夏門人二十歌仙河原同林田舎白合常盤屋白合 其角 於凡 あり

天和元年酉 行年 世八 同二壬戌 行年 世九 同三癸亥 行年 四十

和其角葵屋白 其角号葵屋白又蝶舎或は白合 本姓白合并成也振平成母方の姓

新島より我れめり 娘をささくる

一祝又貞享二其角の大酒をいりぬなり八百と云

慶方知酒聖貧始覺錢神といふ白居易白を前より

花よりたせ我海志ろく言くは

此年は冬深川の草屋急火かきまれば治あやふらう 瀬のひなを遊ばるきて煙の中にいまのむねひさる 是そ栗の緒のはらふきけりぬ

爰猶如火宅を悟りて五石位の心を養へて其次の年佛頂和為 深川

寺住 破の奴六祖五年と云 甲物は深川にて佛頂和為は 是と云はるなり

六祖の家より自聖年け反りて遊をけりて

自書云甲斐の國郡内と云ふに及る逢甲は昔吟 二反るはく 我を修らんぬかまらわ

一祝甲斐の郡内各村に初唐村と云ふ處是と云ふは初唐村有力は身徳寺と云ふ 翁の由き一物まうあり又初唐村は深川の所なりしと云ふ深川の唐院夫の唐の所は許一翁より深川ありて初唐と云ふなりと云ふ

又深川の唐院ありしは悦く悦原の同村を庵と信ひるは

心ゆく深川源もくと又を心張一様を載たり

貞享元年甲子 天和四年 九月改元 深川在唐 行年 四十一

其まや新年あり 多末又并

秋八月古郷赴る千里

俗名油屋 同傳する

は時のさむらひと申す紀行の事なり

野々々々々々を心よ風の志むるらん

秋十と世却て江戸を去る古郷

東海道をゆく舟楫を載く

霧時雨ふこを足ぬきおのりしるき

富士川

吉原と蒲原より

の遠小推子を憐れおひて

猿となく人推子に枯れぬいしり

万上の風冷

道行くこの木槿を万上の風をくさる

小夜の中山より

馬よおて残夢月遠く草の煙り

伊勢よりて松葉屋風瀑

實は伊賀の人

成爲て十日たての足とど

焚火の光を信

みそら月あゝも草の根を抱あじ

西行名の麓を過

茅渚小女西川あゝ秋よりす縁

まよると山田の雷枝を訪を早くも数句を吟傳へ

霜まゝせん西行あゝ秋は暮

雷枝

まをばと暮れ風の破き並

といふ換板あり其夜にたれれ又の日岩山を訪り

師の操せりし捨ん本乃桑りぬ 塔山

まゝたゝ霜は幾 四十一

とつと挨拶あり或茶店を昼休しあひけるふ家女料紙取持せり
とつと秋ひつりしと書付終り

葉は香や蝶乃翔たよりのす

閑人庵牧を彷彿

葛植く竹田又本はありしかき

長月の始古は海乃ぬ は伊賀の茶店をいふ
後再形房よりいふなり 亡母の白髪を撫て

手もくく消ん涙そめりき秋乃霜

又田里を歩く大和に起き葛下郡竹の内より入子里に古のまま敷

日原とまゝと旅愁と着ひぬ

綿弓や程程とめくむ竹のおく

二上山尚麻寺 又祥林寺と云用明帝第四
皇太子麻呂古教王建立なり 又信て庵への松を見たりしに

大さゆ枝かすまゝいふくたれをまのひて

僧あさか不い死ころる法のまの

芳野より切 古花院南湯院あり
いふ妻帯よりあり に舎りとのむ

礎打く我り一閑せよ坊々あ

西村の旧記よりしは清水を尋く

露よりしし試し浮世まゝかまや

奥は院より今く後院御席の法をね

津原寺を經く志のふれを志のふれ

大和の山城を經く近江路に入る遠くを今頃山中に遊ぐ

義朝の志のふれはたけり河きりぬ

不破をまゝして

秋風や萩も烟も不破り関

株瀬川の木固昔は株瀬川のり家をもとめて或は聖の松蔭を觀し

死もせぬ旅のまゝとあるの書

是の大垣のぬれ前大垣の古家跡に傳へられたるはは後にはては家守は戸田氏の居

霜をき旅のまゝと樹を着せり

古人のやうに萩のまかり

とくし移りあり尾州に往く相葉林の家をまゝにまはりて源切をば

は海より草鞋も持んまゝとく

師乞の海へたゞと人にいさあをれぬひて

海をきて鴨の志のふれはのふれ

熱田の宿をひりふ社に顔破あり

志のふれも枯く保かゝりぬ

名護屋入る長途の雪はるを紙衣の浦に嵐ふもあつとあつて

あつりしの身は竹高まぬたるとう神

は時御宿の宿あり
左山の抱月亭を遊むひり

市人といふもまゝとらんまは

十二月八日一升亭遊記有

旅宿うゝおた師乞乃夕月夜

又勢州杖と曳く葉名の奉焼寺古益亭ふ遊ひて

冬牡丹子なるよ雪はかゝる聲を

州の杖とお供く涼の方と立歩く

あけ不のやふ急志候きあとい寸

爰ふ字鞋をとれたしこ杖を並くと何書ありて

と年 雪の笠さるゝ多鞋を記ありて

貞享二乙丑行身山家三年杖歌ありて

誰ら楳そ蓋染と録お入りしし年

或人の許にて

旅のうゝ古菓を梅にありまけり

又菊都のぬみ

真如色や名もなき山の鈴のひみ

太ふら七七重七重 伽藍ハ重 梅

二月堂ふ籠り

羅索院と号
本号釈世書

名取や氷の僧は皆乃おと

在原寺

石上村在原山本堂古伝に在原寺と云
業平殿居の旧堂の地也

うゝ心も浅魂と眠るを 梅 柳

まゝに流るゝと一升杖風う鳴院の山家を訪

梅多し一たのしや新をぬきまう程し

伏見の西岸寺 浄土宗三世室譽
上人能名任口 任口上人筆の心

我衣又伏見の志に志づくせよ

大津の山と山路を越

山路をく何やらゆりし 萱叶

は時堅田の僧子那 本橋古号
蒲苗坊 大津の尚白青無門人 青無門
平筆 近江杖を以て

大枝や一と引換し一かきみ

かきみはの松たむよりかきみ

水とて過るよ田友よきき存命を悦ぶ心

いれちよ河中央は活たるさうくかき

二月盡又尾物に蓬高き相替の家をまじり 遊語有 昔藤田三
秋仙と云 笠
寺に訪たまひ

笠もやめぬいさやもまき

笠もやめぬいさやの言よりち早稲山就福寺と云秋言の壺端笠を召するゆ染乃本
條ありゆきよ笠もまきと名づく歌あり笠を有歌

四月のはじめ豆所の素門をあひて

いさよも小棟まきくち草枕

二つに相葉の作ま東に赴く日とれを告め心

牡丹葉のくちかきみ辨名残の心

夫より甲州を經く

新駒はまきくちかきみ

同月北来深川松風の別墅に到りたまふ

夏衣いもつて風哉西流くさし

伊勢北風瀑を送るゐひ

こまればはる佐敷の井山よりまき見

冬茅店に偶居し閑居の歳を作つゝあひて

酒の免をいづくおれね敷の雪

乞く喰らひ喰ふく喰ひて年終るをいと詞きめて

めぐる秋人の数も入らん老乃言

貞享三 丙寅 行年 四十二 深川に在

伊勢の賣家より見下る代の春

春風の雪もまき乾くふそかりたる茅店の閑ある折うらむ妙なる
今もゆくて

古池や蛙飛ちむおれおと

隣居の僧宗波旅う赴きける哉

古葉たぐりもれあそびとぬりふ

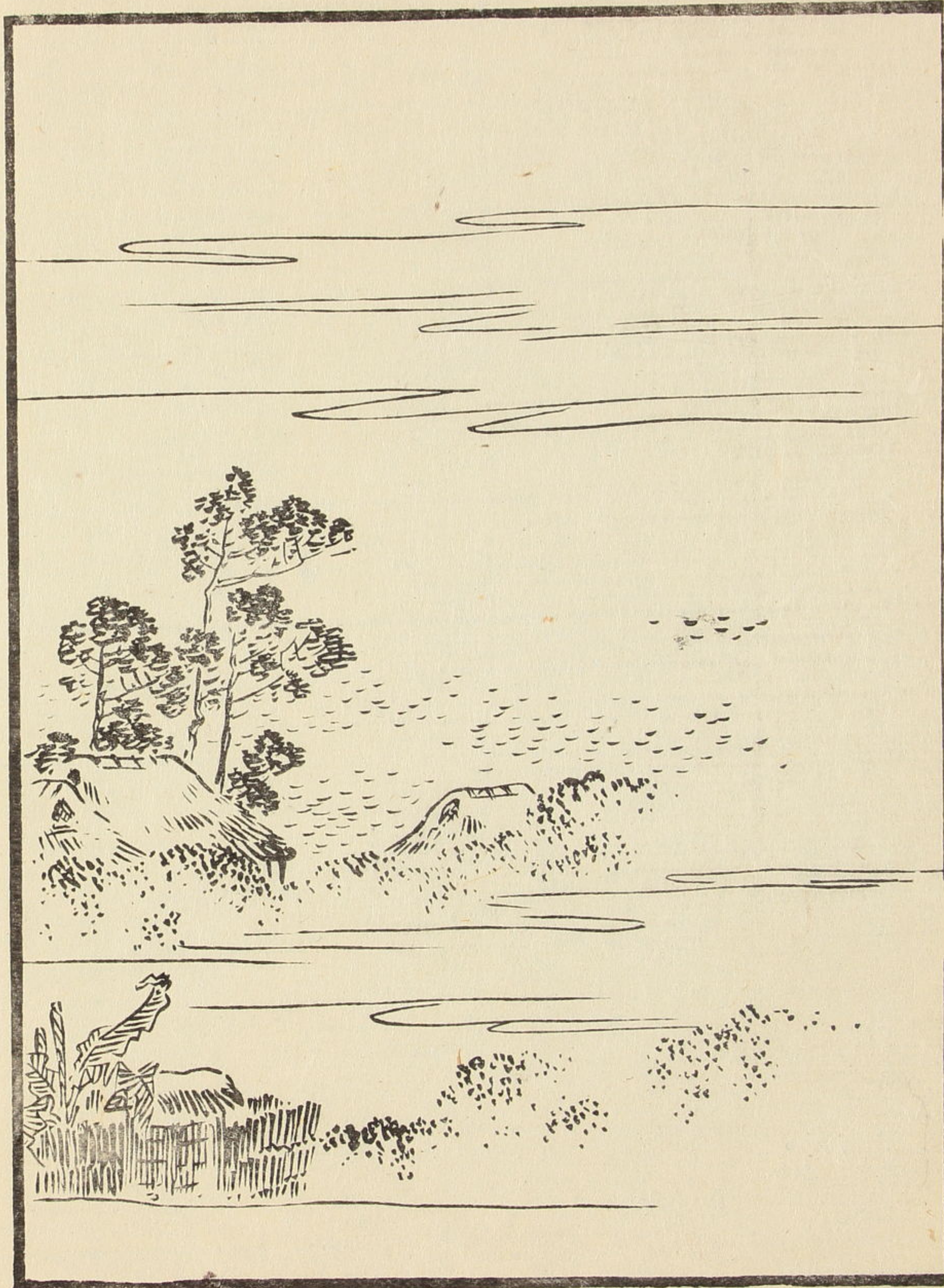
春の日集感反四月常陸潮来の本間道悦

号自半亭集の
後同お小川に在の門に今も春を言ひぬり 起信文貞享三年
丙寅四月十一日とあり 冬もきて深川に

歸りてふらひ芭蕉庵を他として

阿も春は行くやほりたりとの古柏

素弟とある和漢の遊供に貞享丙寅と記すを尋るに春のふそかりの門に今も春を言ひぬり
すといふ字は年終る中とすあれは春の終りて旦武を丁卯の年と也下るなり四月



月を如く一梢を雨後持たせり
神前を結わひて

北松の實をえりし世や神の林
田家を道邊に

新うけし田面の鶴や里の阿き
幾れ子や鶴をりしけり月夜に

潮来は自準亭に又郊原をめぐりて

萩原や一木をやらせ山はいぬ

八月下旬江戸より又十月古郷へ赴き

行原紀行又
芳野紀行云

旅人と我名もも色 萩 初時雨

露沾公 号遊園亭 号城
内名長久 又其南亭にて鶴別の舎に暮らすと感の心程を綴り

一尾松を志しし 雪うたの一方雪

鳴海より

星崎は雪をこりしや 鳴子雪

本陣寺高氏業言亭遊ひ飛鳥井雅章との和歌を知りて

京すくたまし 雪や 雪は雲

報治出守氏雲亭にて

おもしろし 雪や 雪の雨

実思高知是亭 酒造家傳
今代名と云 下能保河のて之河國保美村小杜園の

まけり哉訪人の鳴海より廿五里斗を越し神池下茶店に休らひて

松葉樓より手紙あるをさうれ

越人

越智氏或人云
北後集の信士

と俱に吉田の詩よむるなり

きとれと二人旅おそたのゆき

河津川絶筆と過

とくみゆくやるとさゆる歌ありし

保美村の杜國の道あり

麦もえりてよれ徳き家やとけむ

さゆるとそ暮なきまはれおはる

又尾州の往より杜國同傳にて伊良古崎より

杜國年
あり

雪のひと見かてられいり古崎

越智の法にて修羅の成就たるをねたす

磨きを鏡もまよき雪の花

ま度の指提を過るとけりて

宮人よ我名紙ちりせ落葉川

名護屋の今と過りて終るまで休是なり

いとゆきと雪見よ轉りて

防川亭より

雪を擲る梅よむる軒端より

又杜國の伊良古崎は唐より中河き人の手と伝はるるなり

雪と雪今宵所をけ名月を

此百波州岐阜大垣の人其く俳諧あはれしくい有所走十日の事と告
昼をゆく回里不赴きぬし

旅病してらんや浮世乃煤をくむ

兼名越過り永里ふるとかむ杖突坂むきけりかむとに鞍打ふりて
るよるを落ぬし

かちねく杖突坂を落馬うり耶

古郷に帰る

古内くや指の緒は位とくしの書

古内の俳諧は五房と稱すといはる所謂再形房初名兼名房兼名房
兼名房兼名房西麓房是あり

貞享五代辰行年四十五宵の年宵の光緒をくまんと回友其きて酒と舞

元日病忘ふしれをくけし者て

二日あまぬしうをせし花の表

風麦亭に遊

ちるまをくくさく九日お聖山いれ

山里を菊菜おそく梅の花

卓袋亭に月待し招ききりひ

月まらちや梅うけけゆく小山伏

山家に遊じて

多き白く石炭ほる玉の梅はむ

門人猿雛

佐石

對しぬいて

もろくく けろく 路柳 ままら 人 命

或人曰はるの句 後素と人同に訪
宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を

結の懐旧の情を述ぐ

丈六の陽炎言 一 石はう

伊勢 渡山 信く 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を

うー 狐の 結の 句

伊子 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を

二月十日 阿久利 神踏山 出る 福小 西行の 涙を 志す 信 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を 宗七宗を

むとけ 書ある 句

何れ木の 花とる 志す 人 白む 句 耶

をたう 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

十五日 忍愛の 館と 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

神垣 や おもひ 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

善哉山 神照寺

山寺は 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

綱代 民部 弘成の 男胡来 一本作 許ふた 志す

梅は 木の 猶や 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

二葉 軒 訪の 句

藪 栂 門 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

龍尚 倉 神威と 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す 志す

物は名を先とて種の名茶の那

又伊賀の海とぬふ上野茶師寺の初會

初梅折一もさうたより記日記

藤堂探丸

新七郎良長と稱す
主計良忠の男

成長の後芭蕉翁の宗彦なる時良忠

首と魚の別楚の花を稱して招き初と對面ありしう只いむ出せ

詞よめく互に藤原精刻の後

さあ〜はるおのひをささくかき

春の日さや〜草うらむゆ〜

探丸

さあ〜梅森とて
今性存とて

蕉翁の糖草とて侃諧一坐時のぬまよと難行彦

宗彦亭と数日おひらむて

花枝宿よと〜ぬ終りやせりやと

はる〜浅花をれい〜人の色う那

芳野の杖を曳同何杜因

自林秀
筆丸

乾坤を何因行二人堂は表と表の

芳野とてゆ〜んせう〜梅 笠

大和の國今井梅井と造る丹波市とて

草臥〜宿か〜るや夏の花

高尾村

花のうけ信不似〜旅あうん

初瀬の歌音は靈場

春の夜や菟人ゆ〜〜夢の渦

葛城の麓を造る

磐石多し花もあけゆく神の歌

三輪多武峰崎峰

雲霧うらやまに峰の形

龍門の龍

海飲まじらんうた龍の世

龍門の花やと戸に土産もせん

西河の龍

ほろくと山吹ちる龍の世

結城の龍布留の龍一尺一尺の芳野の花と日蓮のまこと証

天下はありと歎息ありと西よ人の田記昔清水

甚るの本下みはくし一帯の形

凍解く雪も汲むは清なる

まじり河の世とて紀伊高野のまじり

父母の志きりに急ぐ龍の形

行喜と和歌の浦まで追付する

紀之井寺とて龍の海

龍と川流くしるまおひぬ衣之

南朝のまじり

龍佛の日ふせきりし鹿子丸

招提寺山法鑑生和尚

沙石集唐の法皇寺は鑑真和尚が唐武天皇の法皇朝に於て南都の東大寺法西の釈迦寺作聖の某所寺との難風を凌目言をせりといふ 此縁をおいひ

若葉一々青目のあつく枝をこや

旧友と別きて

唐の角足一物一のこつ流り耶

去芳云一年古木の法流より太子は聖徳太子の冠をたぬくはつとく後の并帳に赴くまゝといふりまゝこの法流といふはつとく

まゝと津は國を越く大坂を去るのひて

くたつたまゝかゝるも梅のむく月を

源麿の浦と一尺一々

月をあれと留されやまゝ源麿の友

をむきたるわくといふまゝあのみまゝ書ひて

鴨牛角よりとけよ源麿の石

阿の〜れ夜泊

峭壺やまゝめき夢城友の月

鉄搦と岸をせく

源戸の海士の音先と岸や都に

ほ〜と清い〜方やあひ〜

源平は其代を絶へ浦のあつた初と志石のあひ又流る山城よ

石山寺の宗鑑

信長と源平の三郎範重

の旧記を訪

あつた〜姿あつた〜人かきは〜

大津に越く本曾路に起んとしむる

はなつる田あは月よくく魚らん舟

祖翁の日記

自筆一冊
之のちり

六月廿日大津と出る川は雨七日赤坂と前

八日岐阜とある秋芳軒直白と云ふと云く稲葉山の松は下海
小長途の旅愁を慰めぬ

山よりや方哉善人旅もつけ

人にしとあされは岐阜に鶴岡をかんぬ

おもろうくやうやうき鶴舟の如

又たうひきくは川の年急能

岐阜山よはる日

城あしや古井の清多先同ん

は折りく藤梧う少年旅うしむるを悼むぬ

と旅き人よあし一人花も友聖ふ

長等川に降るる賀崎氏う水橋も無心記と云て十八橋と名付

はあつる目くゆるとはこれ海

桑門已る許を寄りなまは僧古あるは地くこまやはしるるれハ

やとるせん蒸れ杖うあつる

杉野休桑軒長虹う居を訪く

粟科くまうくもほし草の居

田中法花をう訪ぬひて

新秋や子猫かぐくの晴乃春
大曾根成就院

何より此尺立より似きこの月
晴満の程の心て

初秋や海も喜田の一みとし
知是る才金湯のう新宅を習し

よ此家やまき地よりこころ菅戸の粟
はあや一日遊ひぬてく撰題喜瓢を侍

夕顔や秋をいふくの瓢の那
名護屋ふ入那ある旅行を送る

見おくりのりしるやさいし秋の風

或曰は古集
所見ありと云八月更科の月尺立と旅立ぬる同行越人
更科
紀行

送られつおくりのりしるやさいし秋の風
今廓お送りし之をかくすて

新号 号種
本堂 僕を添へてのり路を助く棧をぬい

のけをいひのちをかむ若きうら
痛楚や道標なる場なる味ある四十金をうと越く娘捨山の月を袂とぬらし

傳や妹もしり泣月乃友
善光寺

月影や回門口宗も只むと川

吹飛せも石ら海苔の形知らぬ

越人をしてひく江戸も福なり 越人とは今の越後あり
あゝ那基よ

福の自まつ白竹林の月を玉級の里津持山とありあかき
竹ありれり目よりとあれはなほ十三夜とありぬ

本居の燈もやうとあゝぬと后の月

素盞亭菊園の會もなれぬひて

いさゝいのつきうと朝よはらぬ葉

源川の草履も閑居にて

枯枝も鳥のと海とたり 秋乃雪

或人云は向正室在年と江戸の言は振るなりと云々も中よりとありと後葉集に
はる位は

雪とらぬや穂屋のきききお前のこと

と云向とありぬ然きとも翠年漢のほそと去年の秋江上の破屋と蜘蛛の古葉
秋のひてとらぬあれは難ふく八九月の江戸の源屋をうねりてとありて伝説を過りし
とを信じてきたりぬ

元禄元 戊辰 九月 行年
改元 源川在居 甲五

冬就と又より海んはさしら

朝うさを誰かあそ片さし

去年は健病と思ひ出く越人消息し 杜國改修の時越人を捕せられ
たきはありぬ

二人見し雪わと年と降ける

盗人よりくおとあり年の暮

元禄二 己巳 行年 四十六 源川より春をむさぬ

歳意よりくふきを人氏や庭 電

は春曉時集成興の旅の趣んがむゆる方人の譲り先程風の別墅橋り

叶は戸も恒替る代替む赤の家

同行曾良

生得藤整して号
宗悟佑名とあり

二月廿日の曉舟を乗置別墅の令に別く

行春や多啼魚は目を涙

其日草加と一病野州室の八島を信ぬいて

京遊と結むつきたるくありん

二十日日光山の麓鉢石下は佛を在るよとくもわの家をよ

なすの行月朝日街山を信ぬよ

阿たたやと春葉若葉は日の光り

裏見の眺

亭くくも流る霧もや反たすも

文とと燈然とて

秣押し人をも志をうけ反那の那

是朝よとて彼代浄坊古園書

秣押桃其身桃翠
佑名居士初名吉史

城とく一紙借あり

一日郊外より大追物の如と見え又那溪の篠原茂きて玉藻

の前乃古墳とてい八幡宮に信つね殿の温る明神あり

湯とむもく入誓ひもおめし石清水

修徳光の寺に招きぬひ行者寺をおいて

夏山と足結をおむ首逢う那

雲岸と北界と佛頂和尚の山居の如を信

木囀り居る破ら人夏木立
言久の宿青楓佐名南家又飯病のひて

落来るや言久の宿はほとどき

殺生石

石は鳥や友州あく露若し

芦野に里遊行柳

田一板うきくまう柳うき

白河の冥を越阿武隈川流るるかけ流るる緑岩嶽郡流賀川

の舞等所号在羊高保品伊左衛門う許よまうて

風流のけい久やおくの田植う

四五日止と葉門万伸う軒の聖は祠を去ぬひ

世の人にはん付ぬむや軒の粟

等羽り許を去て楢皮宿をとり色安積山二本松尾塚の岩屋

をいりて福高の舎を志のふりまうは石を尋

早苗とるるまえやむう志のふり摺

月の稀は涙をもらえ瀬うらる飯塚の里鏡野の佐友彦うら

蹟とる精舎号王寺よ今く義經の大方弁慶う後とる人のひ

笈も右刀も年月うらうれ紙幟

甚和飯塚うやとる葉折紙うら伊達の大木戸と紙う一鏡摺

白石城を道葉輪を並高を志望うのひて

笠島ちりつこみ月かぬのり

岩沼の泊武隈の松

橋よりとねお二木を二月越

名取川をさぐるさく仙臺へ入四六日逗留一かゝ重工加藤の地
より入れ國の草鞋を贈る

阿やめ村是しむきもく人草鞋の緒

玉田栢野つしう岡草師堂天神の徳社本をね一おくれ細道乃
山邊をたると十符の若とんあひく市川村の多賀城を並の碑とてんし
野田の玉川沖の石まね松山を過く塩竈へ舎の成求め社次神社親の
目を驚く一泉二郎 名忠衛 秀衛三男の忠勇を感へ松島へ渡り六月十日瑞岩寺へ

信く十二日平をたるとりて河ねをた松島をた橋よりとさくたかへく

石の巻と出金無山と海舟と源めやして袖の浪尾をた牧場の萱

原かと金赤あははしをる石を舎り平島 秀衛 康衛の旧記 ちかる高館 義徳の旧記

夏州やつとこのとこの夢の記

二重城ね

又月島の津路しとや 老いと堂

南郭街道と遠くんやと岩手は里の泊中忠時と川のふ島と
道ふとこれ湯より扉前の雲よめをて舎りあひ

帯とくみ馬は扉きとまつく元

出羽國の裁りふ海とふ人記されしとて 喉路の地あり定ふは

尾を遊の清風録本の家をさすの心

源一とて家ありてあまらざる

眉掃を伴ふ一と紅のまゝ

山歌飲の立石寺

号室琳山在室上中野布有
筆師竟先古師 深甚

淡路んと七里半を以て

かの精舎うま

志川うさや岩ふまゝ入輝の考

新庄の山歌何風流亭

備後
あり

最上川を流るんと大石田の榮

保名下殿
平左衛門

完二日和を待て

備後
あり

さみしさを河のめぐるや最上川

此度の風流はあ
りてはなす

こころをなす板敷山志の院仙入の難

道く六月初相見山を定て南谷の別院の舎別當會元念はあじせらる

有かや雪をかきりけ 南 谷

涼しきや平は三日月の相見山

八日月山を待て

雲の岸ゆく川端をて月乃山

湯殿山を待て

語りきぬ湯殿うねる人袂うね

遂く三山を待て鶴うまの城下重行志山の家を舎りたすむて

臨りしや山を出羽はす川 茄子

又もみ川をのり酒田より合道保名寺
ありの待てぬ六月十あり也

暑きり夜海へ入多し 赤土川

不至

号 岡倉儀家
伊豆元姓 亭に舎袖の浦の眺望

河つゝ山や水浦うけそくさききみ

山をまゝ一礫を傳ひ家濱を舟渡りてく

家濱や雨の西施う袖ふりたる

夕をまきやさくくう源む浪のむ

文より北陸道一柱を武加賀の府まで百三十里嵐の冥を越せ

越後の地より越中北境の市振は雲より は若丸の路を過るるよし
みくまの記をいふ 出雲崎の舎

あゝ海や依波に横たふ銀河

直江津は河を寺の舎りぬ

文月や六日も常は東よふ似人

高田より信師細川青唐亭より遊ひたかひ

茶楼より雪のま那を草枕

新譜

海に降雨や無き深き舟

或人云は白雲
不知とあり 親志より子より大原の駒のへり一と云は国一

の難不浅経く舎りてぬらぬ

むと川家より遊女もあつらふ秋と月

又早八瀬とのしおやくの川を渡ると那古は浦より櫓籠の差浪

と余はより久く加賀は國より入

早稲の香や日け入右なる磯海
舟の花山徑利仙舞う若

くうか〜やと〜ひ起て〜落〜あ

或人云は句
吾人云は句 金澤より先一葉 お松氏稱
美新七 暮る信

塚よりまけ我泣きや 秋の風

小春亭の遊ひの〜其意山海の時味を語らぬ吾友をお〜た後也
其次の和は會わ海那川下ゆ〜一葉落〜あ〜容意を大〜見
のひて只お茶の〜た〜

ま〜落の〜ひ〜秋味を〜手〜た〜ま

一本は左様のぬり亭
とま〜八張あり 舟屋の柳漣軒向を〜亭〜遊む

敷柳何〜〜我も鐘を〜

少幻庵の遊仙譜あり 其竹の句抄若草〜
〜毎二軒遊〜あり

秋〜〜ま〜あ〜むけや〜瓜子

小松〜

志あら〜記名や小松吹〜秋〜

親水亭〜

ぬ〜〜ゆ〜〜人〜ま〜か〜雨の森

太田の神社の訪富友別當実盛と甲冑とたぬ〜

あ〜む〜さんや赤冑は下のみ〜す

皆後二のその
二葉首〜 山中は温泉の〜

山中や葉らまをくぬほろは白ひ

志し根を嶽とけりえふ一那岩の観音を掲げて

石山のふらうり志路一林の風

は源首良を病むるを先きて勢州より

くくうりし書付消ん笠は露

大聖寺の城下金昌寺の一翁一あひて

庭掃く出るや寺うらうり樹

越前の境吉崎は入江舟楫うりて淡城の松を尋ね天龍寺より

門に入らば藤鉄子菜のあふむくれ

北枝 此の字は北の字に似て 北と送る松雲の原居より別は枯く

も北書て扇門まきく別色うりぬ

笑くくを務るはむ心出さくや 北枝

六十町山へ今く永平寺を礼し福井よりお等載を尋ね

名月北尺ふ同人振菊きん

或人云は句
此の字は北の字に似て 但し教賢の赴くは那の書阿さむつ 佐の字に似て 玉江を尋

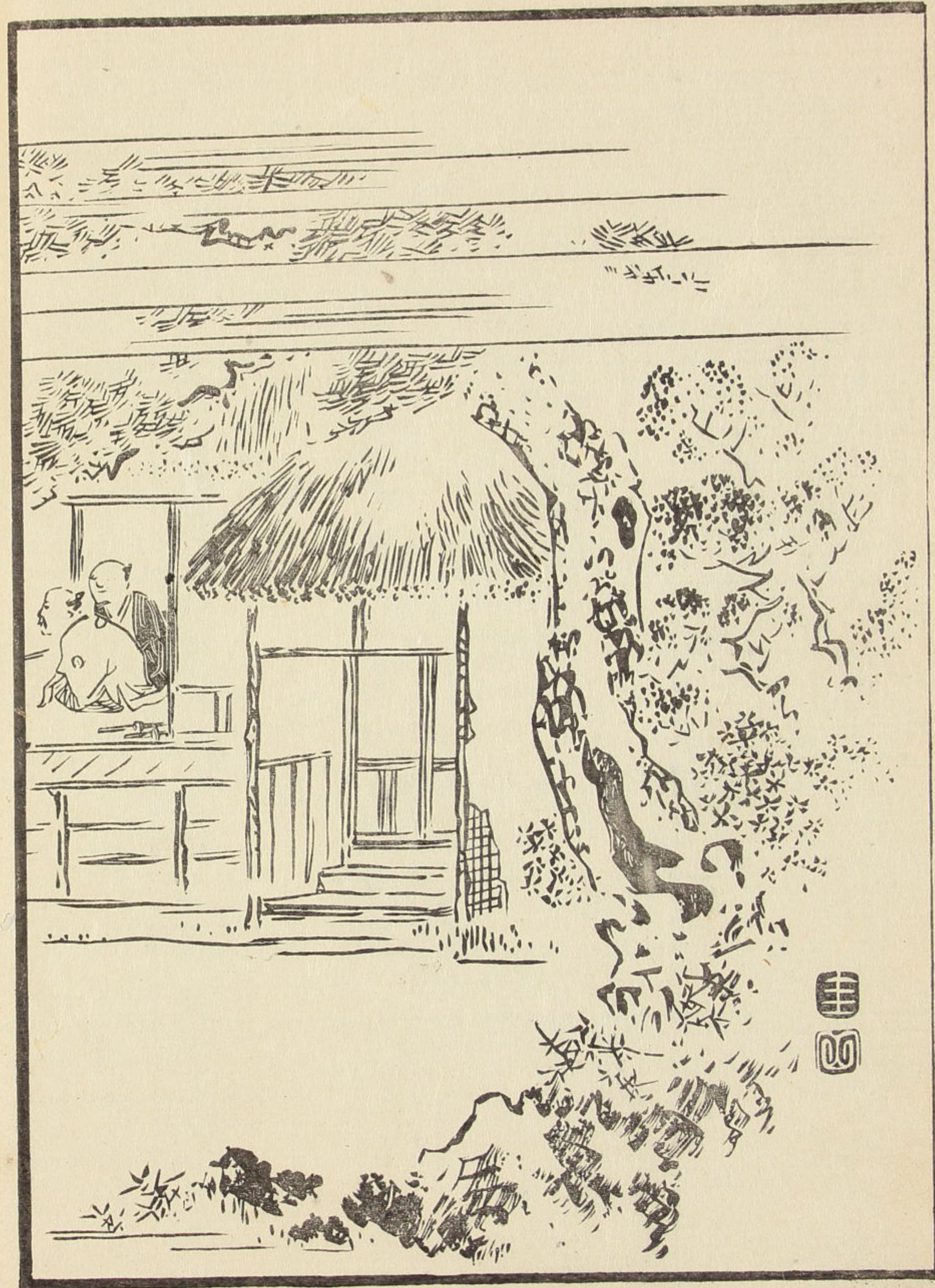
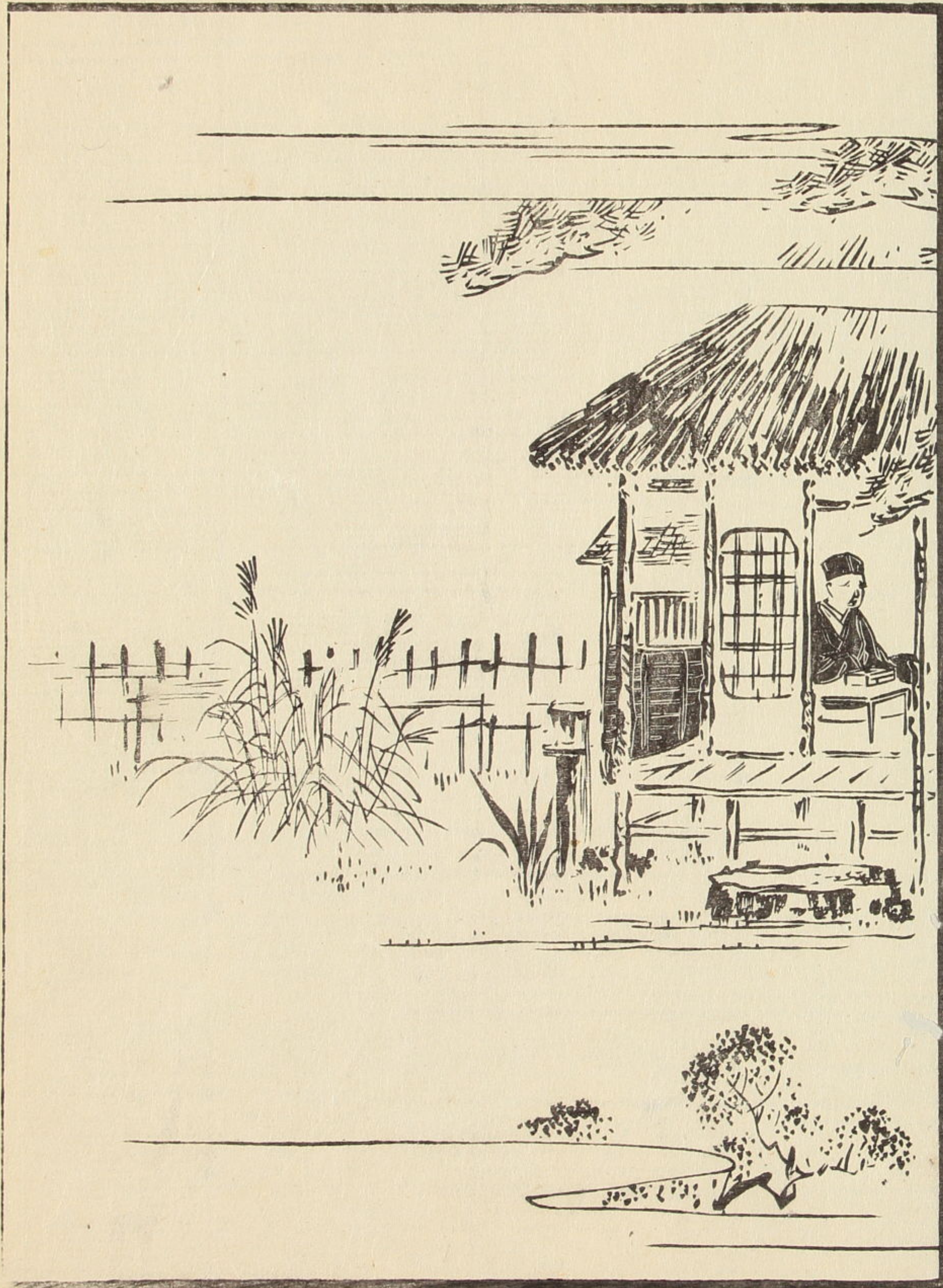
阿さむらや月尺の板の明さる那き

月尺せし玉江の芦紙州ぬ光

雪の冥湯の尾峰より 纏う城を造りし

月と名をつみあきてやいもの神

義仲の病覚の山より月忠し



蘇州府やうり蘇州府やうり

同六日本管川と小舟とて下る

路のくさくささうらぬゆ〜りきそ

内宮を奉りてさうらぬお宮の近宮とてせつきの心

たうらさふれお〜あひぬ所近宮

山田とて〜中村とてふと道

秋の風伊勢に差原猶凍〜

又云ら家とてさうらぬ〜其處の〜感〜の心て

月さふ〜明初らあは〜し〜きむ

立冬に比伊勢の長尾味と越て奉らぬ〜赴けり

初時雨落と小笠を海〜けり

さ川雪やいら大佛に柱立

まらと落〜せり〜途中

いりめ〜き〜音や〜れの松並

玄丸 佐居面舟
平次郎 の落柿舎とてさうらぬ〜新町とて玄物とてまた尺格を以

とて秋事か〜持たひ〜ふ院とてち〜〜感〜の心

長喃ら懐も久〜く秋の辨〜き

菟月とて玉指不〜赴けり

何〜此師 乞の市にゆく鳥

元禄之庚午 行年
早七 都道とてふ〜と近〜と相とあるて

誰人か菰着ていさか花は春

又伊勢よりして二尺の園をねりぬひて

うたのうた子遊のむも浦は春

踏字亭より遊ひ

夜夜のぬきも折ん雨乃花

園女

若師 室西 中 徳名
一有 妻 後 大 坂 住 居 住

亭より遊

暖簾のゆくもはゆりー水の梅

伊賀より花垣の店とよひ

一里とよ花守は子孫のや

木白亭

島打おとわありしの梅麻

後堂喬木亭より遊

おもしろ花や木深き殿造り

又近江より立越太清の松碩

徳四

酒落筆遊く其記とよひて

四方より花吹入る鳴乃海

木の春にけり能もさくかき

孰集城遊る徳とけ情来とけとありて

新集城ありふみの人とよみたり

夏四月初て石山は奥國をしの幻燈屋を鑑みて今其記を作して

先たのむ推の本よりなりて

一書に元孫三のて友と圖を山と我の山とありて里のきく谷川の源と採きて
一石より字の法華經を言ふのいふと云

おろろ岩人よいとあそび上林に入亭にて

苔尺や椀郎 確しく是來那

大津の青鳥亭

旋花れみししの秋の夜半の星

加州秋の坊（字）と称して住居ありてめこ夜飯宿のいふ

我宿を故のちのきと池をいれ

林原まで見送るあひて

やうく花ぬきし秋の人と人際の手

旅病や為冷らうらふ林のやま

といふ白と秋のいふ其宿を出給ふ

は年友林のる糸の去ある北史并野水等幻住居の事と伝説あり是ら様蓋集あり聖年
はる暖かい化云五年の去ある北史の事と伝説あり是ら様蓋集あり聖年
とありて上系集ありと云ふ

其秋本宿の宿（号）と名宿又よん就て推戸の人々を對し

草花戸を志まきや穂葉の宿ありし

待宵を楚の亭良來たる本宿懐らと云ふ

糸くまの友派さういひの月の宿

三井さすつたかきやまの月

十六夜と名月の沙具とて遊あり舟とて之堅固又打坐の深き遊

十六夜や海老茶碗の宵あり

鏡明く月さしよし浮舟堂

既世の
後あり又其原堅固と道途一のひて

病席の夜きよなる旅おるれ

海士の家を小海老と交りいふ

醫所本既の許さしめをきひしふ宿意八珍をき淑とあん

壁をまわく砂を吸岸の能う那

大津の丹墀 俗名ある馬
能くまきまきり亭をぬひのひし骸骨との留教をふん

く能くするはまのあそく舞臺の座よりけたる海をふ生前のたきくま

おふは盡くことぬんやうは鬚髯を扱て終りまうくともわく

はるま只は生あそくまあそくまのあそくまのあそくま

いあつまやうるはまきすきの極

無名房の閑居よ乙州 尾留月
のみう一掃を携来しつ時

竹はたやわりるくく色一草の酒

李由 江戸東田の既世の盛
軒執又秋葉年四様屋志東の三人と對し

薬箱と様とうれしき草の席

渚の雲竹 俗名ある
はらば書家也自画の像を替てせまれのひて

あらしむけ家よきひき枯の著

冬京よ起る大津と道く

と尺の山も何ししの本葉のれ

所盡の別當景概丸く行も遊

半りた神と友よや 年々くまき

瑞月の末渚をゆく古津の乙洲の家よる

人よ多とかなせて 我ら年々くまき

元禄四年 末行年 湖沼の暮名居して 暮を迎ふ三日宵は四日と類す

わ〜女有〜

大津絵の草花を〜 めら何休

乙洲の武江の下を〜 飾〜

梅若菜ま〜 この宿のとうけ

田家よ遊む〜

麦め〜 やつ〜 鳥の猫の妻

一書ははまの白と難波のり〜 一かゝりてとむと松花の〜 名情の〜 句とひ
然と難波のり〜 一かゝりてとむと松花の〜 名情の〜 句とひ

は年猿蓑集成又渚の〜 相國寺の〜

黄ふ〜 感ある竹の〜 や〜

上院

留ま〜 小僧の〜 山〜

嵐山

花の山〜 丁け〜 大 悲 宮

は以支考 号柳子賦又甚二話在能城
西花切尾お大山の春あり う在河の飾〜

は〜 推せ〜 花よ〜 若一也

京〜 木〜 木〜 川〜 和〜 花〜

正月十日吉見の落柿舎を暫く止る其屋を祀りて 小智の屋敷をりて

うねりや竹のそとを敷人乃果

落柿舎類破とけし出でて

さみまきや色紙屋きたる壁の位

袖のおよむとを思ふ料理の旨

六月四日其家を出る川原納涼まきり

川風や落柿舎をりて夕まきり

大津より丹波亭を遊其家名を称し

むらり〜とゆるる扇やまは奉

蓮の香より目と通すや面乃鼻

其月より池仙亭を招りて

は病をなす鶴と志しぬ廊より

秋後不ふふ心秀号志 亭は初會を招りぬ

月代や猿より紙おく宵の病

堅田の森深可休亭

祖父と親其子に屋や柿に叩ん

石山より信ぬ

檜樹は志のくく月の名残より

落石の曲翠号志 亭を遊

乳麵の下禁ふ敷夜をかか

冬末武之起人...一名月の李曲の詩よ

たふとけの涙や深き散もみち

百年のけ...の海の落葉の乳

流州の越々垂井の富雄が、詩よ舎里

作り木の庭をいさむる志なきころ

又耕雪の別墅の遊ゆよ

本...の海の白むやけの胸と花

大垣の越々川亭の云

折...の海の伊吹を乃々や冬 籠と

斜嶺亭御代尾州の往々熱田の梅人亭の遊

名仙や志なき澤子けいも福也

以時名護屋の落川入門号月之河を越て新城の白雪の詩よお二人の

子に桃先桃後の名を興へり

其みちを桃よりあし名仙花

此時多考 桃海同本の家士若原権忠の宅

京の儘くはあらししや冬恒ひ

風を吹くよま就一の心

夜急ひし川新中へ梅摘る如

本...の海の岩吹とけりる松百妙子

富田の御如舟堀本の家よ名

宿りて名をりらす時るれ

雲月のけん免武府のあゆみ

都出く神と稼稲の日数り那

三秋を經く深川に歸られけは八田友久群集ていふく同徳ふ

鬼のかくりくくや雷の枯尾花

比老橋町と名ぬ聖三年の秋深川の宿を再興一
三人の梅とくこのまゝいふ仙化文の追善をて

袖の色もく後くまきー流 亂

魚をばすくろを志しとーの書

元禄五 壬申 行基
四九 橋町とて数年ーのい

年ーや稼と名せたれ稼の内

其角處をば二人と對ー

あの手と桃と梅や草は録

孤石のみちけり行を送る

むく起る漕の花乃みちひうり

時を時やみ尺のあやふん草

雪は潤明と美むとけし玉もて

あふりーと豆梅のこまやたうり

秋素雪の母乃七十七は祭と招く色あひて

七探のと秋のよふや星はあき

比良許六 号五老井又稱孝河佛
依若藤川五郎と稱名長 門入る深川の宿再興ありて入り種あ

秋風松風を情を別り住居を管段代り物敷家などいふ月
のうそをいひて芭蕉五のを載す

芭蕉五のを載す

九月浪無は酒堂深川より流すあり
芭蕉五のを載す

の口切を招きて

口切の堀は庭そま川あり

許六亭より遊む

くさくさの里人より年より初時

素堂亭より志すの會

昔香いと花の笑ふ出立ころ

元禄六 癸酉 行年 五十

元日を田舎のりくきけき

僧寺冷く旅より送別の時あり

鶴の毛は黒き衣やま那の雲

露沾るよるまで

西行の庵も河へ舞むの庭

夏許六より別す時

推し花の心も似よ本音の旅

又流川へやみらる

み月あまの鳴れ浮葉をんよりん

秋軍関の説と作らぬい

朝うらや昼を寝おろそ門の垣

七月七日の秋の雨をとおろそ

高きより星も旅病や岩の上

源川の末末松の舟をさして

川よと此川下や月あり友

門人松倉嵐雲

板倉庵の伝
八月五日

う誂と出ぬひて

秋風あり折るくさき葉の枝

初七日其墓より信ると有て

尺一やそは七日を墓の二日の月

東順

吾其南の父
表は 毒子

う信と出ぬひて

八月廿七日を机に四隅う群

盆水亭より遊

秋待や暮れ暮のまゝ豆腐串

八丁堀より

葉は花より石屋の石の石

大門通りを過る頃

琴箱や古物店の省戸の葉

小名木河の相美を招くれぬひて

秋の流るる行をや来らぬ松川

十月九日素堂亭より花園の遊有

華は香も庭よききたる履の履

菅沼曲翠の旅館を訪く

煙火や聲もる客の影ほろし

後堂玄席より旅館を訪葉根と際しつとけしとけ

とけぬの大根うらぬ

有明も三十日ふ近し餅の音

元禄七甲戌 行年
五十一 深川在席

蓬萊の竹もや伊勢の初便り

上野の花尺よいさめをきぬひて

四つふ巻の掛もぬむんころり

本徳まで茶摘もやふぬ物

子冊亭も指すぬひ

宗陽もや藪と小庭の別室敷

掘隣の新宅と負し自画賛を贈りぬ

室のりぬ露や牡丹の花の蜜

炭俵集別中後集成立日十月十日洛より赴き甲子結ひ深川の席

正室二のり亭
同元禄五 とせるとけしとけ

芙蓉もや竹は子藪も老をま

は時京橋の乙州の家より三つと誘むぬひしと乙州をゆりて同姓を

名残惜りよんゆる別きて東海舟を經ぬ小川崎を經て送るは人よ對し

麦の穂をよりのふつうむ別きてくれ

晦日若根の葉を越す

目よかぬ時や殊う五月不こ

きりり路や魚橋も葉はふあひ

大井川あきく西田の御舟家も送る一ぬ

昔よりいま葉あうに茶子汁

さみさきの雪あき落せ大井川

夏は月津油より出て赤坂や

尾州より名護屋の舟より葉を越す二日送る一田家の今に對しあひ

世を旅の代うく小田北新屋

野舟と宗居けるを訪

涼しむら拵國よんゆる信むう那

美流り越く先平田の本由う方一文と強りかひて

昼白よひるおせうもは床乃山

大垣より玉田氏子川より日光御代葉を信存する送るゆふ

篠の露をものまうりかけりるれ

蔵田氏も遊る

葉つけしるは扇りや田植漁

又名古屋より東てうへぬ小田川より葉佐葉をて送りしる信ふ

徳上山田成素染々亭の飯指のあひ

新鶴ふくと人のしとや佐若泊

由伊原の越く上野丁を定 山田平素染 飯指の流す 庭ふれと鶴と見あひて

一説は自裁のあひ
とよし

源一とや直と新松乃枝は飛

流り赴き去る嶮峨の別楚の納涼のあひ

東路は毛勝たるか一麻ささみ

新流よりとをて源一血の流

聖明亭の遊

源一とを信より一けり嶮峨の竹

今ついで居て血の名不何ぞと云ぬる中一

血の波むかへて愛や蓮臺聖

清純のあ波くせと心古

と云即時の血を短冊よりけりたまりとらうと思ふれけん引きて
終らねととまり

小倉山常寂寺の宿

松林を月あつや空のかさるる春

六月や峰の雲おく 麓山

清流や浪よりとり色青松葉

竹と道途のあひ門人之道 後更終行 浪華は人 對して

我の血を二つり一割り美葉の

七月廿八日 養老山 精雅亭 遊心能信有良辰山家遊

名月と麓のきりや田は曇り

名月ありを那うしんをて 輝烟

十六夜を養老山に遊りぬ

今宵 惟より一 名月十六日

浄野の望草亭

里よりて 柿の末わくの家もぬ

は須ま考伊勢は 後と信む山居を 宿をけしに

暮るまをましこむてまを山居に

まをま考惟然といふまは 大和と赴きまを 九月八日 養老山

木津川を系河司はて舟とより 奈良良き名

暮れ多や奈良良き古き 佛を

暮の香や奈良良き 幾代の男ふり

結海の邊り舎を求めたまひ

むのとあく 尾をりぬし ねの鹿

寫上峰

暮れ多よこくか 奈良良き 奈良良き

其より大板と智鏡を奈良良き 難波のがし 古のこよる智鏡
と下て雨の菰の身をりて 都は地をハ乞食の掛は
身をりよれハ 奈良良き 室の歩志のよる 玉のよる 日暮て

暮ふ出く奈良と難波を宵月秋

浪蕪入るひしう人とはまきやしと教ある席よけく天を
恒吉の深きと心まきく遊むひ

此秋を何とくしふるを

十三日恒吉の市よりぬひしう屋のふとくし雨ふり冷行静
あつたをきくると悪客ふ惱みぬひしう次はねをて快しとて醒
止亭より後ひおねの月の名跡をほくのし恒吉の市にまきとけいふまで
外雲てを別替る月尺より那

此秋を谷川醒止亭
とてい他借あり 歌月下送思と瑞書有て

月流や狐情う秋の性

其折亭

秋もさやきつて雨の秋

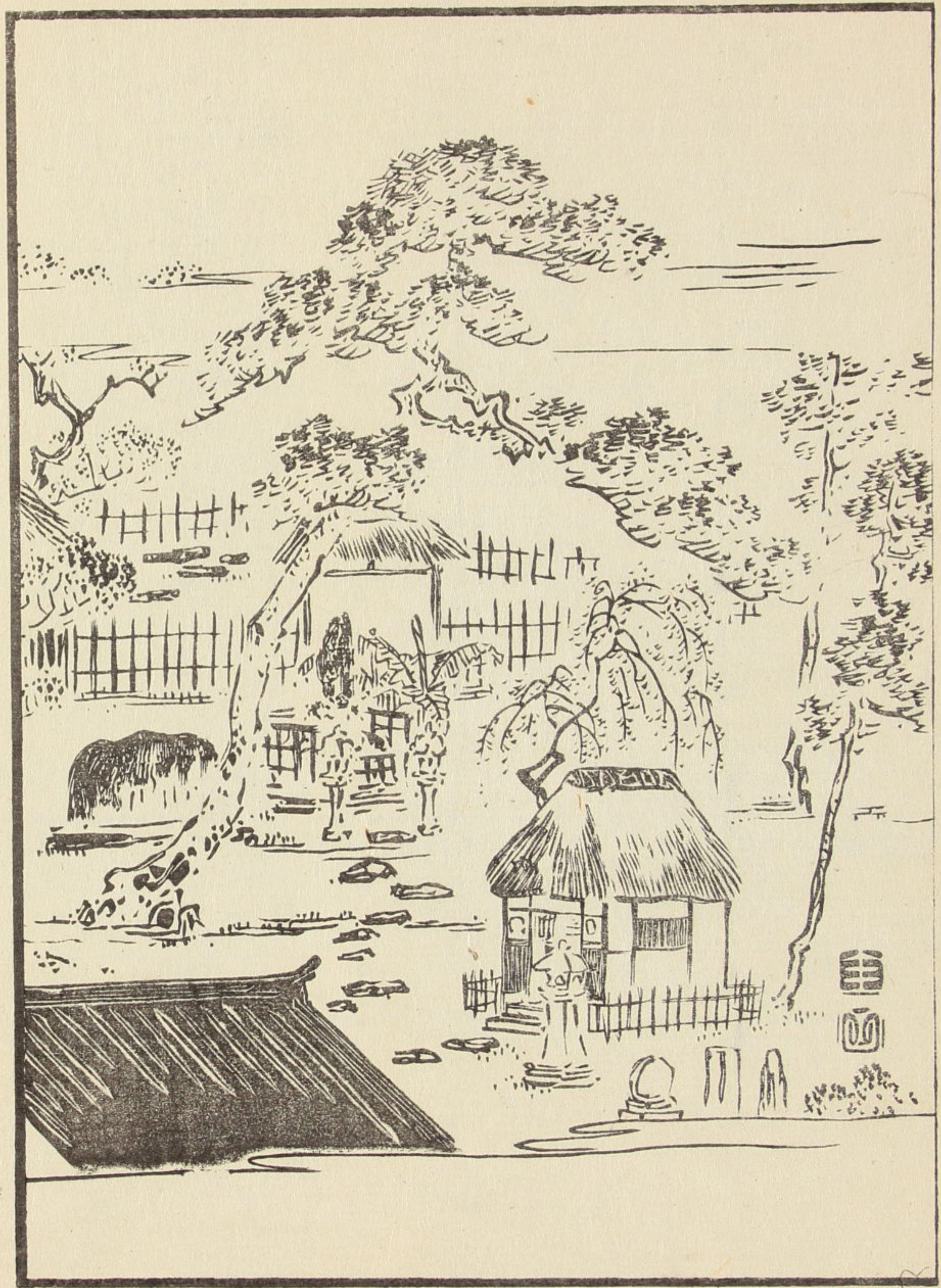
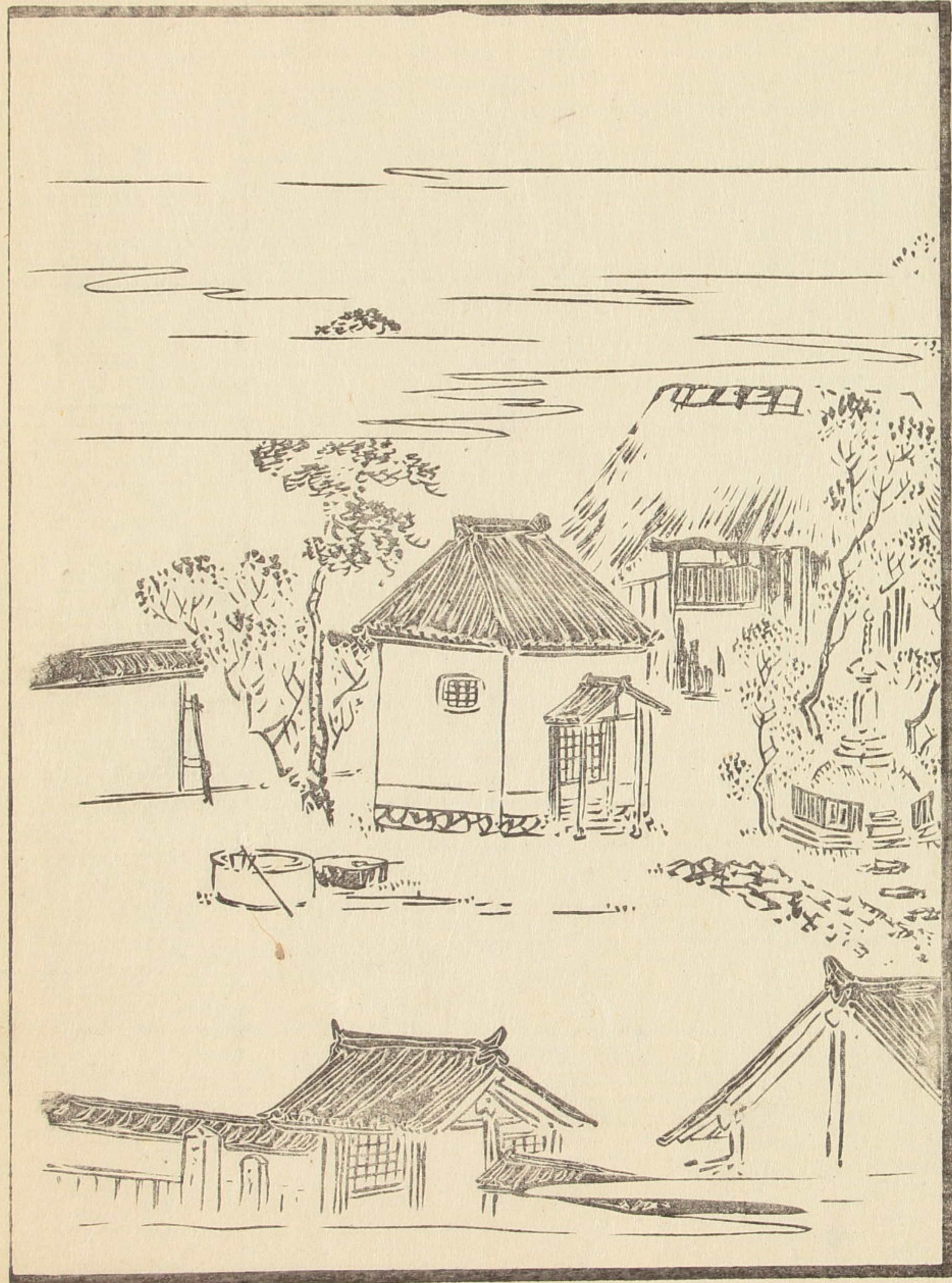
廿一日二日と又車痛亭遊

秋の秋を打角一たる秋
おきしるき秋の秋痛や亭遊あり

園女亭

志く兼持自ら立たる者ありし

廿七日清和の茶店 此亭 四郎兼の家遊入るはくなく輕冊と秋
松風の軒をめぐりて秋人きぬ
は道やゆい人ありし秋の香



一説は日向を流るる其便基よりして
ありやうと云

廿八日又睦止亭に遊ひのむて

秋涼き隣を何をもとめんと

芝柏う招きよと懇しは敷向と巻くやとれと懇を必ゆらん約し

たよひら園女亭は管意の園は塊積う隣ととえらきて廿九日

池前のはりとの有て海軍前花倉仁左衛門家に休む此の看病の全考
惟然酒堂之道

舎程 菩薩 若舟 次郎 長流
尾妻貞はまかあり
十月二日三日の夜を病漸くにつのむけるよと云

想ひて又日とてあはれつ人親友の消息あり
此のとき道里遠境の
門人二十餘人よりと云 六日の以

ガ一休と申す七日小京より去真江州龍王の史料
号佛の店
信石の店 大徳を

本堂乙州格不れ字表か若ある八日秋涼更なるを抱持する若舟と云

旅う病く夢を枯野とす

と云向と云一あゆみ其後玄米支考とては吟の可否と問ひ九月

病華ありけむは古一の文造物の沙汰あり十日の夕其南東其南
より時

若舟の病をよつ人といひはる所一かてゆき
是等の大坂旅病の悩めよとて急き地事しと也 其夜卜的はよふ本長を誘し

中たれけるハ吾生れも明るる通りねを覚ゆる也素より水宿を樓の

分はは茶うの茶とて海よりうらな果きよと云ふ只秋ハ老子け

業より定初まの居を流しゆと涼く頼むる其後た右の人欲

退けく不浄とありし香を短く後安臥してそののひ陰を以十二日

の申は刻斗を候ふとく迂化よりひをる門人おのく涙るる事

あり其相七骸と書櫃に入川舟より十餘人従ふ休見不

善光寺

此社は少室山の李由よりしり其角よりありて樵之居し其後信光の
所より昌房撰志より其居して信房よりしり伊賀より後継五芳年袋よりしり
皆亡後よりありしなり也其居りて十日の
埋葬よりありしなり

十三日湖東小島本宿塚の墓石房より入りて十日とて埋葬し
定心招きより馳集る門業旧友三百餘人也其像といふありて
粟津の義仲より收畢

石碑 芭蕉翁の之字

信史町の尊也

僕等果いぬ天保十年甲戌つ々一
歴のちわくく言良山玉々其宮にち中とてあつ
かへに祠事ありこと言改のれとの支のりま
神祇伯長二位次具延王其もらにわく
桃青両宮神の御代ねたたくは
心りこくもは又書をねりて
せりしきり文改るもの
敗壞ありしを志せおる
七に補修をくくしり

せふぐー標ふにきくーぬ又かききに
解ありすの致に曰

亭ありて出ちしハ亭を垣連り可を甲斐の湯折の社
をいふ心ははくしき良山柳をちち神のいふ
永く流流のちち成を後 ぬふ

重石子

今よりありてぬやいさる

乳つてぬぬ 枯屋也

